

●3年生「公民（政治・経済）」の授業。この日は、「日本国憲法で保障された人権」について考えた。自由権や社会権の意義を考える具体的な事例を通して、「公正とは何か」「幸福とは何か」といった考察を深めた。（P.23に授業デザインを掲載）

議論しやすいように、机をコの字型に並べた教室で、まず、生徒の1人が前日に気になったニュースを、「今日の時事一言」として発表。毎回ランダムに指名されるため、全員が準備している。続いて、前時の終了後に生徒が記述した「リアクションペーパー」から、ベストクエスチョンとして1人の疑問を紹介し、皆で考えた。

生徒に絶えず問いかけて
発言をつなぐことで議論を活性化し、
教室全体で思考を深めていく

前田先生のアクティブ・ラーニング

問いかけを繰り返して
教室全体で思考を深めていく

生徒に向けて絶えず「問い」を投げかけ、生徒の自由な発言をつないで教室全体で思考を深めていくのが、前田先生の指導スタイルだ。積極的な発言を促すため、生徒が向かい合うコの字型に机を配置した教室で、前田先生は真ん中のスペースに入り、生徒の発言を拾いながら思



石川県・国立
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高校
前田健志 まえだ・たけし

教職歴11年。
同校に赴任して8年目。地理歴史・公民科主任。
アクティブ・ラーニングの実践は12年目になる。

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高校

◎科学者の育成を目的とした特別科学学級を母体として設立。「自主自立」「独立自治」の精神を重んじる。2014年度より文部科学省「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」の指定を受ける。

◎設立 1947（昭和22）年

◎形態 全日制／普通科／共学

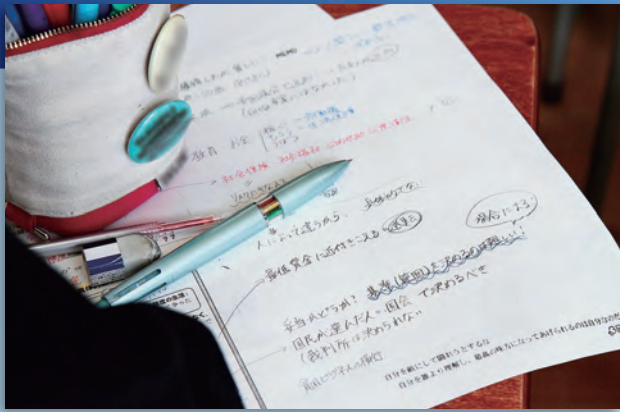
◎生徒数 1学年約120人

◎2017年度入試合格実績（現役のみ）

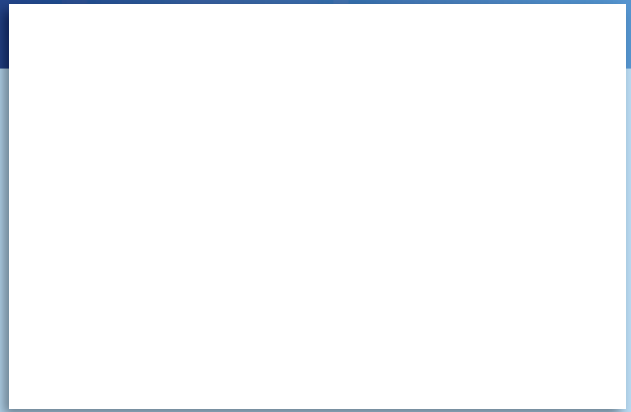
国公立大は、東京大、東京外国語大、金沢大、京都大などに51人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ74人が合格。

◎URL

<http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/kfshs/>



「経済の自由を手に入れた人々が次に求めたものは？」という問いかけから、社会権の学習に移った。当時としては先進的な社会権が日本国憲法には盛り込まれていることを、日本国憲法の条文を通して学んでいく。ノートは、スクリーンの丸写しではなく、要点や理解したことを自分なりに整理してまとめるように指示されている。



「君たちが持っている財産とは？」と、生徒に身近なことを思考の出発点として知的財産権の学習をスタート。先進国と発展途上国の立場の違いを示す中で、先生が問いを投げかけるだけでなく、生徒からも問いを引き出しながら、知的財産権を軸とした南北問題についても議論を深めた。

考や対話を促していく。黒板への板書は、生徒の意見をくみ取る場合など必要最小限にとどめ、あらかじめプレゼンテーションソフトで用意したものをスクリーンに映し出す。

特別な目的がある場合を除いてペアやグループでの活動を行わず、原則として全員で議論するのも特徴の1つだ。そのねらいを前田先生は次のように話す。

「生徒の思考をアクティブにできれば、全体で議論する方がより多様な考えに触れられますし、グループワークは、教師が生徒のよい意見を拾い切れないという側面もあります。一人ひとりが役割を持って参加できるというメリットがグループワークにはありますが、それは『総合的な学習の時間』など、ほかの授業で行うなど工夫しています」

前田先生は、赴任当初から上書きを重ねている授業の台本を基に問いの内容を精選し、授業に臨む。指導案も問いを柱に構成している。

「問いがなければ、学びではありません。まず私自身が疑問や不思議に感じたことを基に、生徒の思考を想定して問いを設定していきます。それが授業の幹となり、そこから派生するように生まれる生徒自身の問いで枝葉が形作られます」

もともと、事前に設定した問いは、すべて用いるわけではなく、あくまでも生徒の発言をつないで構成していくため、クラスにより議論の内容も異なる。

思考の活性化・深化への配慮

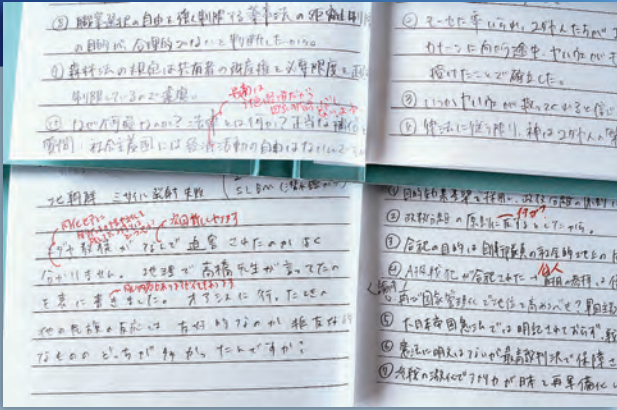
問いを与えるのではなく 生徒の内面から湧き出させる

問いは、前田先生が一方的に出すのではなく、あくまでも生徒の内面から湧き出るようにしていくことが指導の肝だ。そのため、授業展開は、具体的事例を通して「公正とは何か」「幸福とは何か」の考察を深めるものとなっている。

例えば、知的財産権の議論で、「新薬開発には巨額の費用がかかるが、特許権は守られるべきか？」と問いかけると、生徒の多くは「守られるべき」と答えた。続いて、「先進国と発展途上国は新薬の開発力に大きな差がある。それでも守られるべきか」というケースを提示。それに対してある生徒は「ルールだから仕方ない」と答えたため、前田先生が「貧しいのは仕方ない」と言っているのと同じ。納得できる？」と返す。別の生徒たちから、「特許の期間を決めたらどうなる？」「発展途上国は割引価格にしたらどうだろう？」などと声が上がった。前田先生は、「そういう案もあるね。公平ではない場合でどうフォローするとよいかをよく考えて」と、思考を一般化させる発問を行った。

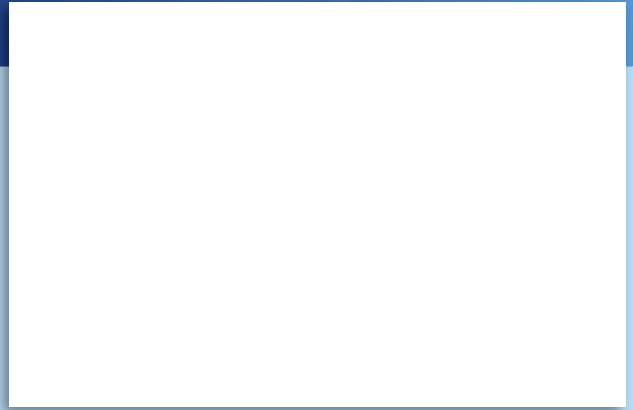
教科としての知識も 議論を通して身につける

生徒が深く考えるためには、問いを持たせるだけではなく、思考の土台となる知識が欠かせ



貧困ビジネスが横行する現状などを整理し、「これから自分にできることを考えて実践してほしい」と先生。最後に、授業のポイントとなる問いの一覧を示す。生徒はそれらの問いへの考えなどをリアクションペーパーに記入し、先生に提出する。

生徒の声 ペーパーが小さく、それに合わせて書くうちに、考えや疑問を簡潔にまとめられるようになりました。



社会権の1つ、生存権が焦点となった「朝日訴訟」「堀木訴訟」を提示。「人間として最低限度の生活とは?」「クーラーはぜいたく品か?」などと次々に問いが示され、「公正とは何か」「幸福とは何か」の考察を深めた。

生徒の声 議論が深まるにつれ、現実社会の問題は、必ずしも皆が納得するような基準を設定できないことが分かりました。

前田先生は議論を活性化させるために、入学時から「間違ってもいいから、何でも発言しよう」と繰り返し伝えていく。それを実現するために、何より大事なことは、生徒の発言に耳を傾け、教

場づくりへの配慮 教師が生徒の発言を受け止めて リアクションすることの大切さ

場づくりへの配慮

「私が教えるのではなく、生徒自身が考えた概念に言葉をあてはめていきます。そのようにして、自分の頭で考えながら学んだことは、単に暗記したことと比べてしっかりと定着します」

生徒は、思考を深めると同時に教科として学ぶべき知識も身につけていくのだ。

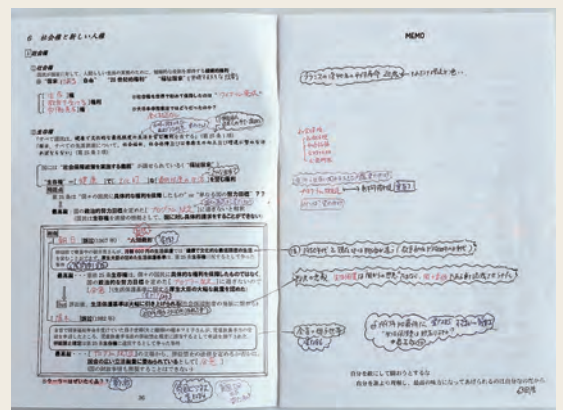
「前田先生は知識も一方的に教えるのではなく、生徒自身が考えて獲得するように促す。例えば、「社会権」には、生存権や教育を受ける権利、労働基本権が含まれることを理解させるために、前田先生は「健康で文化的な最低限度の生活を送っている人は?」と問いかけた。ある生徒が「文化的な生活って何だろう」とつぶやくと、別の生徒が「本を読めること」「スマホを使えること」と発言。前田先生が「それをするためには何が必要?」と問いかけると、「お金」「知識」「教育を受けること」といった意見が出された。そうした発言を取り上げ、「そのために社会権として、労働基本権や教育を受ける権利が保障されているんだね」と述べた。

「また、出席番号などでランダムに指名するように見せかけて、意図的に普段あまり話さない生徒をあてることもある。どの生徒にも発言の機会を与え、最初の一步を踏み出す手助けをする」と、多くの生徒が自ら話すようになるという。そうした工夫により、積極的に発言する生徒は増えていくが、あまり発言しない生徒もやはり存在する。そうした生徒の思考が活性化しているのかを確認するために、生徒が授業の最後に記入する「リアクションペーパー」を活用している。授業のポイントとなる問いの一覧を示

「『また発言しよう』という気持ちになります」

また、出席番号などでランダムに指名するように見せかけて、意図的に普段あまり話さない生徒をあてることもある。どの生徒にも発言の機会を与え、最初の一步を踏み出す手助けをする」と、多くの生徒が自ら話すようになるという。そうした工夫により、積極的に発言する生徒は増えていくが、あまり発言しない生徒もやはり存在する。そうした生徒の思考が活性化しているのかを確認するために、生徒が授業の最後に記入する「リアクションペーパー」を活用している。授業のポイントとなる問いの一覧を示

師がリアクションすることだ。



前田先生が7年前から使用している授業の台本。生徒のリアクションを踏まえて問いを再検討したり、時事トピックを追加したり、常時見直している。

授業デザインシート

【教科・科目】公民（政治・経済）

【設定時数】7時間中の4時間目

【分野・単元】日本国憲法で保障された人権

【本時全体の目標】主体的に授業に参加し、自由権や社会権に関する具体的事例を通して、「公正とは何か」「幸福とは何か」を考察し、思考力・判断力や基礎的教養などを身につける

【テーマ・作品】「自由権」の経済活動の自由のうちの「知的財産権」と「社会権」のうちの「生存権」まで

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
知的財産権	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に授業に参加し、知的財産権について多面的・多角的に考察し、公正に判断する力。 議論を通して、他者の意見を受け入れる力。 知的財産権に関する基礎的教養。 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 思考力 判断力 表現力 主体性 多様性 協働性 	<ul style="list-style-type: none"> 積極的な発言がしやすいように、普段からコの字型に席を配置している。また、どのような学習内容でも多くの「問い」を生徒たちに浴びせている。また、授業後のリアクションペーパーで、生徒の理解度や思考の過程を確認できるようにしている（1年間を通して）。 知的財産権については、先進国の観点のみで語りがちなので、発展途上国の視点からも知的財産権を考え、南北問題の解決方法の糸口を探らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「本当に知的財産権は保障すべきか？」など、“当たり前”に対して疑問を投げかけ、深く考えるきっかけをつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 先進国の観点のみでの発言が予測されるので、左記の発問を通じて、発展途上国の視点からも考えることに自ら気づくようにする。
日本国憲法における社会権の規定	<ul style="list-style-type: none"> 日本国憲法における社会権についての基礎的教養を身につける。 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 技能 思考力 	<ul style="list-style-type: none"> いかに当時先進的な内容であったかを条文などを通して読み取らせる。また、日本国憲法制定という背景を通じて、当時の日本における社会権への思いを感じさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「なぜ、日本国憲法に当時先進的な社会権の規定を盛り込んだのか？」 	
生存権	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に授業に参加し、生存権について多面的・多角的に考察し、具体的事例について公正に判断する力。 議論を通じて、生存権に関する多様な価値観を受け入れ、「公正とは何か」「幸福とは何か」を考える力。 生存権に関する基礎的教養。 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 思考力 判断力 表現力 主体性 多様性 協働性 	<ul style="list-style-type: none"> 生存権に関して、実際にあった具体的な事例を通して、多面的・多角的に考察させ、様々な価値観に触れる。常に「どうすれば人間としての最低限度の生活を保障することができるのか」を頭に置き、現実社会の問題解決の糸口を探らせる。また、社会保障の財源や貧困ビジネスなども交えて、課題の難しさを痛感させた上で、「法」や「制度」を整える以外にどのような対策があるかも考察させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「人間として最低限度の生活とはどのような生活？」 「朝日訴訟における朝日さんの生活は人間として最低限度の生活？」 「国は具体的な線引きをすべき？」 「敗訴したら、意味がないのか？」 「堀木訴訟における堀木さんの主張は妥当か？」 「クーラーはぜいたく品か？」 「生活保護費は貯金できるか？」 「貧困ビジネスに対してどのような対策を取ればよいか？」 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な意見が出るように配慮する。1つの意見しか出ない場合は、必ず違う意見を紹介し、その意見について反論を考えさせる。

*前田先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

し、生徒はそれらの問いへの考えや質問、感想を記入して提出。前田先生はすべてを確認後、添削して返却する。

「添削を通して、私の本気で読んでいることが伝わると、生徒も一生懸命書くようになります。リアクションペーパーは、授業研究の格好の材料にもなっています」

成果と課題

生徒の発言や記述に見られる思考力や表現力の高まり

1年生の最初は視野が狭く、思考が凝り固まっている生徒が目立つが、授業を重ねるうちに多面的に思考し表現できるようになっていく。

「二番の変化は、誰かの発言を無批判に受け流さず、『ちょっと待てよ』と自分で考えられるようになることです。私が想定していなかった発言も次々に飛び出して、議論が面白くなります」

3年生になる頃には、リアクションペーパーの記述の質も格段に向上していく。

今後も、これまで以上に生徒の思考を促す授業を追究していきたいという。

「例えば、ある大きな問題を考えていくために、生徒自身がその時々に必要な単元を選んで学び、1年が終わると全単元を終えているという試みも検討しています。もっと生徒の好奇心や関心に沿うことで、生徒の思考を主体とした授業を構成していきたいと思っています」